

# 日本国際情報学会通心

発行日 2009.4.1 日本国際情報学会

## 目次

- |                                  |            |
|----------------------------------|------------|
| 【1】ごあいさつ                         | 会長 近藤大博    |
| 【2】坂本竜馬とジャンセン教授                  | 理事 作家 星 亮一 |
| 【3】第五回研究大会での研究報告                 | 会員 立石佳代    |
| 【4】継続は力なり                        | 会員 斉藤千絵    |
| 【5】名称で身の回りを見てみよう<br>～自分なりの発見を求めて | 幹事 斉藤俊之    |
| 【6】地方研究発表会(大阪市)のお知らせ             |            |
| 【7】事務局からのお知らせ                    |            |
| 【8】ご連絡                           |            |
| 【9】編集後記                          |            |



## ごあいさつ

ITの発展は、研究ネットワークを充実させました。個々の研究者の居住地に関係なく、また時間的制限なく、意見交換・共同研究することを可能にしました。

このような時代にふさわしい学会活動として、ITを十二分に駆使することが求められます。ニュースレターなどが、印刷媒体のままでは、その購読範囲には、距離的・物理的な制約があります。その発行も、IT新時代に見合っていないではありません。

印刷媒体の制約を超え、全世界に研究仲間を求め、かつ全世界の研究仲間に資するべく、当学会のニュースレターを発行します。大いにご活用願います。

会長 近藤 大博

## 日本国際情報学会通心

## 坂本龍馬とジャンセン教授 星 亮一

来年の大河ドラマは坂本龍馬である。

龍馬はどういう人か。

私は幕末維新史の中でもっとも魅力的な男の一人と考えている。

しかし彼は幕末史の大詰め段階で暗殺され、政治の表舞台に立つことはなかった。それが残念である。

なぜ龍馬は暗殺されたのか、暗殺の実行犯は誰なのか、黒幕は誰なのか。これは、いまだにはっきりしない問題である。巷間いわれているように京都見廻組の仕業なのか、それとも、もっと違う男たちの犯行なのか。

さまざまな見方がある。

坂本龍馬が志向したのは、幕府も含めたハト派の路線だった。日本人全体が参加して新生日本を作ろうというわけである。

その方がよかったと私も思っている。会津の悲劇もなかったからである。龍馬は最後の最後まで、その路線で走っていた。それをつぶしたものは一体、誰なのか、これは、きわめて大きな問題だといわざるを得ない。

清らかな魂が、邪悪な陰謀によって消し去られた。そのような結果に終わったのだ。

その少し前まで龍馬は長崎で、海援隊の仕事に没頭していた。幕府と会津を倒し、革命政権を作らんとする西郷や大久保とは、一步も二歩も離れたところにいた。

龍馬が目指したものはなんだったのか。

司馬遼太郎の『龍馬はゆく』で、国民は龍馬の魅力のとりこになった。

封建社会という、がんじがらめの社会を飛び出して、龍馬は自由自在に羽ばたいた。龍馬ファンは日本だけではない。アメリカの学者、プリンストン大学のマリアス・B・ジャンセン教授もその一人である。もう退職しているに違いない。

ジャンセンは昭和三十六年(一九六一)に『坂本龍馬と明治維新』と題して出版し、昭和四十年に時事通信社信社から日本語版が発刊された。彼はハーバード大学時代、ライシャワー教授の門下生で、日本にもたびたび来て、高知を訪ねていた。

翻訳者は平尾道雄と浜田亀吉で、平尾は土佐藩の封建制度

制度の講義のためにワシントン大学に招かれた経歴も持つ国際派で、ジャンセンは平尾から何かと指導を受けていた。

この本は四百ページにも達する分厚いもので、世界史的な観点から龍馬を描き、実にスケールの大きいものだった。

ジャンセンは緒言でこう述べていた。

十九世紀中期の数十年間、アジアは欧米諸国と同様に不安と暴力に包まれていた。いろんな運動が進みつつあり、それらのもたらした結果の重大さは、アメリカの奴隷解放、ロシアの農奴制廃止にも比すべきものであった。しかし、両者には相違点もあり、これもひとしく重要である。

というのは、アジアの発展は程度の差こそあれ、前にも欧米の干渉によって影響され促されたものだからである。たとえば日本のように、米人が征服の目的なくやって来て伝統的な社会と衝突したところでも、進歩や立憲主義や工業化などの、見るからに活気にみちた生命力が新しい時代の公式を示し、変革を望んでいた人々をあるいは引きつけ、あるいは反発させた。

インドは一八五七―一八五九年のセポイの反乱の結果、イギリスの全面支配のもとにおかれることになった。中国では一八五〇―一八六四年の偉大な太平の乱(長髪賊の乱)が、キリスト教義の異様な解釈を利用して満州支配者を追い払い、神権的で共産的な新国家を樹立しようとした。太平天国は中国民の中核部分の支持を得ることができないで失敗したが、その軍事上の成功が一つの状況をうみだし、その中ではじめて中国の指導者たちは海外技術の受け入れを本質的な主要事として考えるようになった。

十九世紀の中ごろ、日本も欧米の脅威に直面していた。日本の危機はインドや中国の危機よりもあとで、外国に征服される危険は、実際には日本の指導者たちが思っていたほどではなかった。しかし、一八五八年にタウンゼント・ハリスとの通商条約交渉が始まってから、一八六七年に徳川将軍の軍事政府が倒壊するまでの十年間に、長らく抑圧されていた憎悪心と緊張感が一度に燃えあがり、そしてこの間の知的な、また政治的な激動が明治維新を醸成したのであった。

維新は日本を民族的な統一国家に導き、国際的平等とアジアの指導権獲得に努力させることになった。日本の指導者たちの成功は、アジアの隣接諸国に対し、ちょうどフランス革命がヨーロッパ諸国に及ぼしたのと同じくらい刺激的な影響を与えた。

孫逸仙、康有為、金玉均、エミリオ・アギナルド、スバス・チャンドラ・ボースその他の人々は、ヨーロッパ人の力と才能に対しアジア人として初めて対等の立場を日本にうちたてることを可能ならしめた。あの推進力と統一を、彼らの国にもつくりだしたいと願った。

これらの人々は日本の成功を、維新を指導した多彩な献身的な民族主義者に帰していた。その結果、推新の志士たちは、その行動に追随しようと熱望するアジアの人々にとって英雄であった。

日本国内では、明治維新指導者は新時代の政治家の理想的タイプの範例ともなった。尊王の大義のためにすべてを捧げた理想主義的な、個人主義的な、勇敢な愛国者。その名は志士であった。

第二次世界大戦に先だつ時期に日本で、現役の青年将校たちが古くさい道徳や規律を嘲笑して二十世紀「昭和維新」の実行にははったとき、彼らがその主張の根拠としたのもこの伝統であった。(中略)

坂本と中岡は一八六七年、将軍の辞職後まもなく殺されたし、また彼らの維新活動についてのわれわれの見解も、のちに生じた彼らの名声や失新劇で果たした役割りは、重要でかつめざましいものであった。(中略)

私が初めて志士に、この「高い志の人たち」に、興味を覚えたのは、中国革命の研究の中でであった。明治後期に支那浪人と自称した日本の冒険家たちや、その中国の友人孫逸仙のような人たちは、自身を維新の英雄になぞらえていた。

十九世紀日本の民主主義運動について研究を進めるにつれて、この運動が土佐人の指導下にあったことが、維新当時の土佐の舞台に私をつりこむことになった。これは驚くべき興味と機会にみちた、しかしだれもまだほとんど手をつけていない領域である。

世界の近代史の一大テーマであるのに、これに関心を向けた歴史家はほとんどなく、私の主題である坂本龍馬も、これまで日本に関して書かれた欧米の本にその名があげられた例はほとんどない。したがって、私が彼の話をするにあっても、なぜ維新が起こらなければならなかったかを討論するかわりに、むしろ維新が経過した道すじに、私の関心をそそがねばならなかった。

それにもかかわらず、維新が起こった理由の点でも若干の光が浮かびあがってきたことは疑いない。志士の勇気や献身や理想は通常、実行的な態度、自立の希求と結びついており、それは欧米の挑戦に対する反応の一つの型のようなものになっていたのである。

見事な明治維新ということになる。

ジャンセンと私はどこが同じで、どこが違うのか、それは、別の機会に譲りたいが、龍馬はこの時期、海援隊を率いて、海難事故の処理に追われていた。

海援隊は伊予の大州藩から蒸気船「いろは丸」を借り、運行していた。四十五馬力の蒸気船、積載量は百六十トン。一航海五百両を払って銃砲弾薬を運んだ。商社のような仕事をしていた。一航海五百両とはずいぶん、高い。謎の多いいろは丸だが、慶応三年四月二十三日夜十一時、瀬戸内

海の三崎半島沖を航行中、事故は起こった。この夜はひどい霧だった。

突如、濃霧を着いて巨大な船が現れた。いろは丸の当直士官は、白色のマストの光と青の右舷灯を認め、船を左に転舵したが、相手の船はそのまま突進し、「いろは丸」の右舷にぶつかり、たちまち浸水した。相手の船は紀州藩の「明光丸」八百八十トン、五倍の大きさの蒸気船だった。「いろは丸」はほとんど沈没し、乗組員の龍馬ら三十四人は、相手の船に乗り移った。荒天でないのが幸いした。補償は大いにもめて長崎で談判になった。紀伊藩代表との談判が大詰めに近づいたころ、後藤象二郎が応援に来てくれて、伊呂波丸の損害賠償問題は七月一日に解決した。

結局、土佐藩と紀州藩の問題になり、最終的に賠償金七万両で、妥結した。大州藩へは四万二千五百両を返還、解決したが、龍馬は万国公法を持ち出して、有利に交渉を進めた。

龍馬は法律に詳しくかった。

「坂本のほら」といわれるエピソードが残っている。

京都でテロが頻発しているところである。土佐の同志桧垣清治を捕まえてこういった。

「お前が差している長刀は無用の長物だ。いざというときには役にたつまい」

「なぜだ」

「つかえて相手を斬れまい」

「ならどうするのだ」

「短い刀がいい」

そういって自分の短い刀を見せた。

「なるほど」

桧垣は刀を短くした。

しばらくたって、桧垣が龍馬に会うと「これだよ」

といてピストルを見せた。なるほど、ズドンと撃てば相手は倒れる。

それから、しばらくして、

「やはりこれだ」

といて万国公法を見せた。法事国家だというのである。その龍馬を殺したのは、どこのどいつだ。いま龍馬のことを多角的に考えている。

理事 作家 星 亮一

## 日本国際情報学会 第5回研究発表大会での研究報告

日本国際情報学会 会員  
日本大学大学院総合社会情報研究科  
修士 立石佳代

2008年10月26日（日）に開催された日本国際情報学会の研究発表大会に参加し、「**後発医薬品の普及促進に向けての課題**」というタイトルで報告を行った。

本報告では、後発医薬品の普及が進まない原因を明らかにし、今後の後発医薬品の普及促進に向けた課題を提示した。後発医薬品の普及促進には、後発医薬品自体の品質確保、安定供給、情報提供、使用促進に係る環境整備、医療保険制度上の事項、に関する課題の解決が必要であった。

医療機関で保険診療に用いられる医療用医薬品には、「先発医薬品」と「後発医薬品」の2種類がある。先発医薬品とは、日本で最初に承認され、有効性と安全性を検証する再審査期間および特許期間中に独占販売できる新薬のことをいう。後発医薬品とは、先発医薬品と同じ有効成分を持ち、投与経路、用法・用量、効能・効果が同一となる医療用医薬品のこと、有効成分の一般名（generic name）で処方されることが多いため、「ジェネリック医薬品」とも呼ばれている。後発医薬品は、「規格及び試験法」、「安定性試験」、「生物学的同等性試験」で審査され、先発医薬品と同レベルの品質、有効性、安全性を有していることを示すことで承認される。

医薬品の特許の存続期間は、20年（最大で5年間の延長）となる。特許満了後、その有効成分や製法などが共通の資産となり、後発医薬品として提供される。臨床試験などを省略して承認され、研究開発費も抑えられて薬価が安くなるため、後発医薬品の使用は、医療費の抑制につながるようになる。低価格な後発医薬品の普及は、患者負担の軽減、医療保険財政の改善に資するものとの考えから、厚生労働省では、「平成24年度までに後発医薬品の数量シェアを30%（現状より倍増）以上にす」という目標を掲げ、使用促進策に取り組んでいる。

ところが、欧米先進諸国と比べて、日本での後発医薬品の普及は進んでいない。日本ジェネリック製薬協会の2005年度の調査では、医療用医薬品全体に占める後発医薬品の数量シェアは17.1%、金額（薬価）シェアは5.1%となっている。その一方で、アメリカでの数量シェアは63.0%、金額（薬価）シェアは13.0%、イギリスでの数量シェアは59.0%、金額（薬価）シェアは25.0%、ドイツでの数量シェアは56.0%、金額（薬価）シェアは23.0%、となっている（2006年実績）。

普及が進まない原因として、後発医薬品の品質に不安がある、安定供給と情報提供に問題がある、後発医薬品使用促進の仕組みが不十分である、ことが挙げられる。公正取引委員会調査「後発医薬品を使用するに当たって心配であったこと（2006年）」によると、医療機関での心配であることの最も多い理由は、「後発医薬品自体の安全性、安定供給、情報量等が不安だ」であった。患者にとって、先発医薬品に比べて価格が若干低いという理由では、後発医薬品を選択し、安心して使用することはできない。

厚生労働省では、後発医薬品の数量シェア30%以上の目標達成に向けて、患者と医療関係者が後発医薬品を安心して使用できるよう、安定供給、品質確保、後発医薬品企業による情報提供、使用促進に係る環境整備、医療保険制度上の事項に関し、国及び企業等の関係者が行うべき取り組みを「後発医薬品の安心使用促進アクションプログラム（2007年10月15日）」なかで、明らかにした（表1）。

表1 後発医薬品の安心使用促進(具体的な取り組み)

<b>安定供給に関する事項</b>
国の取り組み: 安定供給の指導の徹底 企業の取り組み: 納品までの時間短縮、在庫の確保
<b>品質確保に関する事項</b>
国の取り組み: 後発医薬品の品質に関する試験検査の実施・結果の公表、一斉監視指導の拡充・結果の公表 企業の取り組み: 品質試験の実施・結果の公表、関連文献の調査等
<b>情報提供に関する事項</b>
国の取り組み: 添付文書の充実を指導、後発医薬品企業の情報提供体制の強化を指導 企業の取り組み: 医療関係者への情報提供
<b>使用促進に係る環境整備に関する事項</b>
国の取り組み: 都道府県レベルの協議会の設置、ポスター・パンフレットによる普及啓発 企業の取り組み: 「ジェネリック医薬品Q & A」を医療機関へ配布・新聞広告
<b>医療保険制度上の事項</b>
後発医薬品を含む処方方を診療報酬上評価(2002年度～) 後発医薬品を調剤した場合に調剤報酬上評価(2006年度～) 処方せん様式の変更 薬局に対する在庫管理コストの評価の検討 等

厚生労働省(2007)「後発医薬品の安心使用促進アクションプログラム」より作成

日本の医療制度では、国民皆保険が採用され、すべての国民が公的な医療保険制度に加入し、必要な医療を受診できる機会が保障されている。しかし、少子高齢化の進展や平均寿命の伸長などによって、国民医療費は年々増大し、医療保険財政は厳しい状況に陥っている。医療保険財政の改善の観点からも、後発医薬品の使用が求められる。

後発医薬品の普及が進まない日本の現状から、さらなる後発医薬品の使用促進策の実施と、後発医薬品企業には、品質確保、安定供給、情報提供についての一層の努力が必要となる。医療保険財政の改善という経済的概念のみならず、患者が安心して後発医薬品を使用できるように改善していくことが望ましい。

## 謝辞

研究発表の機会と研究者仲間からの貴重なフィードバックを得られたことに感謝し、さらにより研究を進め、発表できるようにしていきたいと考えている。

ご尽力いただいた関係者各位に、心よりお礼を申し述べたい。

会員 立石佳代

## 日本国際情報学会通心

## 継続は力なり

私は高校生の頃、合気道道場に通っており、黒帯を授かりましたが、高校を卒業し大学入学と同時に合気道を辞めました。アルバイトと学業の両立は厳しいと思ったことと、初段を取ったことで満足してしまったためです。最近、合気道道場を訪れる機会があり、久しぶりに道場という神聖な場所に足を踏み入れ、合気道の開祖、植芝盛平師範の写真を見た時<後悔の念を抱きました。インターネットで検索すると、私の師匠、猿田善三師範は他界されていました。合気道を辞め、恩師に不義理をしたことは、人生最大の後悔となりました。たとえ週に一度、月に一度でも、稽古を継続することはできたのではないだろうか…。私は合気道を再び習い始めましたが、合気道をすっかり忘れてしまっている自分に驚くことになりました。あまりの下手さに、初段であることは言えず、自らへの戒めとして白帯を締め、初心に帰り、初心者クラスで稽古に励んでいます。せっかく何かを極めても辞めてしまった時点で、後退し始め、やがて何もなくなってしまうのです。



私は、この教訓を生かすため、どんなにゆっくりであっても、大学院卒という資格に甘んずることなく、大学院修了後も研究を継続していこうと思いました。従って、国際情報学会入会は、私にとって感謝すべき素晴らしい機会となりました。修了して一年、精進の場を与えていただき、近藤教授、先輩方、に囲まれ、研究者の一人として少々成長することができたと思っています。学会での発表は、未熟でつたないものとはいえ、私にとっては有意義な経験となりました。今現在、私にとって学会は、まだ研究活動継続の絶好の場ではありません。本来は、研究者同士、切磋琢磨し、より前進した研究の成果を世界へ発信する尊い機関であります。いずれそうなれるよう、地道に研究し続けていこうと思っています。



新参者であり、研究対象も新しく、ラップ・ミュージックです。それは、種類によっては、社会貢献する音楽として機能しています。それを学術的に論証することが、私の研究者としての役割です。今後、新しい大統領を迎えたアメリカ合衆国でラップ・ミュージックはどのように展開していくか、ご期待いただきたいと思います。本学会及び、ラップ・ミュージックの存続、発展を心より願っています。

会員 齊藤千絵

## 日本国際情報学会通心

名称で身の回りを見てみよう  
～ 自分なりの発見を求めて

生涯学習社会と呼ばれて久しい。公民館や図書館にはもちろんインターネットや駅前には講座開催を知らせる情報が多い。何かを学びたい、何かを知りたいそんな人々への機会の提供は着実に広がっている。あとは、本人の申し込む勇氣と同じ教室の仲間と知り合う、新しい縁が築けるかどうかといった行動をする前の葛藤との闘いなのかもしれない。

「学ぶこと」はどう生きるかにつながるとても重要なこと。これは誰も異としないことだろう。しかし、私は、「学ぶこと」の手前にある「きっかけ」を大事にしたいと考える。もっと深く学びたいがために教室や講座に参加してみようと思いつく、いやそこまではいかない。ただそれをして、考えると楽しい自分がある。ここに結びつける「きっかけ」を大事にしたいと思う。第三者から見ればなんの事でもないが自分だけの新しい気づきや発見に「へえ、なるほど」と自分に発するその一瞬が大事だと思うのだ。そこで、この発するための一つの手段を提示したいと思う。

それは「固有名詞」を意識してみることだ。いままでの経験や価値観をもって興味ある、いや、時には全く未知で嫌いなジャンルの固有名詞で身の回りを意識してみるのだ。例えば、車なら「トヨタ」といったように。何かに照準を合わせ自宅の周りでも出かけた先でもいい、固有名詞でみてみるのだ。ひょっとするとそのエリアは「トヨタ」よりも「日産」の車が多いという発見があるかもしれない。また、タンポポや神社など固有名詞を意識して探してみるとその分布に「なぜだろう」という面白い発見がきっとあるはずだ。さらにはその種類や差異、言い伝えなど掘り下げてみると面白さは増すに違いない。

学ぶこと、学び続けること。学校、教室に参加すること。これだけを聞くと大事なのだが難しくかつ重く構えてしまう。しかし、もっと手短かにまずは自分の生活の周りから学ぶ扉を開く「きっかけ」を自分なりにつくってみるといい。小さくてもいい「へえ、なるほど」と発した分、その時きっと前の自分とは変わっているはずだ。

幹事 斉藤俊之



## 地方研究発表会のお知らせ 大阪市・梅田

テーマ: 「現代を生きる、国際社会の中の関西」

概要: 今回開催する研究会は研究専門分野を越えた思索フォーラムを形成し、豊かな共生と自己形成を目指して、現代社会における新たな学術的価値創造を志向する研究交流会といたします。

日程: 平成21年5月23日AM10:30-PM16:30

場所: 常翔学園大阪センター304会議室(口の字形式で行います)  
大阪市北区梅田3-4-5 毎日インテシオ3F

<http://www.josho.ac.jp/corp/jigyoubu/osakacenter/index.html#b>

懇親会: 同日PM17:00-PM19:00より懇親会を行います。場所は会場と同フロアのラウンジ「翔」レストランで行います。会費はコース+飲み放題で一人様5,000円(予定)

参加費: 資料・印刷代、お茶代として500円

参加資格: どなたでも参加可能です。(非学会員も可能)

参加申込: 電子メールで下記の文書を付けてお申し込みください。

氏名 メールアドレス 所属 主な研究内容  
研究発表希望の可否 懇親会参加の可否

研究発表: 研究発表者の募集は3月31日で締め切りました。  
発表時間はひとり、発表20分+質疑応答10分の30分程度です。

申込・問合せ先: [osaka2009@gssc.jp](mailto:osaka2009@gssc.jp)

詳細が決まり次第都度MLでご案内させていただきます。

日本国際情報学会 地方研究発表会 実行委員  
兒玉 善子、岡本由実子、坊農豊彦





+ ... .. +

## 事務局からのお知らせ

平素は学会の運営にあたり格別なご尽力を賜り誠にありがとうございます。此の度、学会の活性化の一環と致しまして、定期的なニュースレターの発行をさせていただくこととなりました。

村上理事を編集長として年4回の発行を予定しております。学会の活動報告や会員の皆様の研究情報などを掲載し、これまで以上に学会の情報を積極的に発信してまいります。

何卒、会員の皆様のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

事務局長 理事 増子 保志

+ ... .. +

永らく事務担当をお願いしておりました立石佳代さんに代わりまして、新たに事務局担当として、兒玉善子さんをお願いすることになりました。立石さんには、ご多忙にもかかわらず、今までご尽力いただきました。ここに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。そして兒玉さん、今後ともよろしくご協力お願いいたします。

+ ... .. +

## 編集後記

かなり以前から、ニュースレターの発行を考えておりました。以前に試験的には発行しましたが、途中で挫折してしまい、なかなか本格的なニュースレター実現の運びには至りませんでした。

今回は、前回の失敗を糧にして発行の運びとなりました。これもひとえに私の非礼な寄稿要請にも快く引き受けてくださった、寄稿者の皆様のおかげです。

ニュースレターが読み辛いと言うご不満を、読者の方々、もし感じたらそれは、寄稿者の問題ではございません。稚拙な編集をした、担当者の能力不足であります。

まだまだ、始まったばかりのニュースレターです。会員の皆様と一緒に育てて生きたいと、考えております。是非ご協力のほど、心よりお願い申し上げます。

原稿等、お願いした場合は、是非あきらめてご寄稿くださるようお願い申し上げます。

編集、発行担当 理事 村上恒夫

